

平成27年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）	
プロジェクト名	日本・フィリピン学生交流と異文化理解プロジェクト
研究所名	異文化理解プロジェクト研究所（所長 人間社会学科 阿佐美 敦子 准教授）
設置開始	2014. 4. 1
設置終了	2017. 3. 31
<p>■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）</p> <p>本研究の効果を測定するメソッドとして、セルフ・アセスメントを採用している。フィリピン理解について、また英語表現力について、CAN-DO Statement(～ができる、～で表せる能力記述分)にセッション前後、回答するものである。セルフ・アセスメントをおこなうことの利点として、まず学習者自身が、自分の知識レベル、言語レベルを評価する能力を身に付けることが、自分の学習プロセスの助けになると感じる点、また、そのことは自立的に学習することの学習者自身の責任につながる点などが挙げられる。CAN-DO Statementで表されるある事項に関して、「強くそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」「まったくそう思わない」といった5件法で問う形を本研究結果においては採用した。H26年度、H27年度ともに、セッションの前後ではフィリピン理解、英語表現力ともに平均で2段階の向上が評価された。英語と切り離し、プレゼンテーション力についての自己評価はすこぶる高い。</p> <p>■現在までの達成度</p> <p>H27年7月、交流先のヴィサヤ大学より教授陣3名を招聘し、学生による大学紹介、日本文化紹介を英語で行った結果、そのプレゼン力に高い評価を受けることができた。さらにH27年10月、12月、H28年1月の計3回にわたり、本学人間社会学部学生8名がフィリピン、セブ島のヴィサヤ大学人文学部学生6名と各90分余りの交流を実施した。文化的背景の異なる人々と交際するとき、了解事項の差異は避けられないが、このような状況下、日本人は相手の規範に順応することを良いとする傾向にある。これを克服し、自文化を相手に順序正しく説明し、理解を得る必要があるが、参加学生によるポスト・セッション・エッセイから、参加者全員が相手国および両文化に一層の好意を持ったことで達成度は高いと言える。</p> <p>■次年度以降の研究（見込み）</p> <p>歴史的知識の欠如が明白となり、歴史認識の養成が次年度の課題となった前年度の反省から、今年度は太平洋戦争中を生き残ったフィリピン人3名がインタビューに応じるという試みがなされ、本学学生の意識を揺さぶる結果となった。一方で知識はまだ十分とは言えず、次年度は実際にセブを訪れ、肌で歴史を知る努力を加えたい。</p> <p>両大学より提供された交流の環境を利用して異文化理解を深めるとともに、相互の交流を楽しみ、互いに好感を抱いたことはヒアリング、エッセイ、セルフ・アセスメント等で明らかであるが、双方の英語力には甚だしい差があり、ほぼネイティブに近い英語力を有するヴィサヤ大学学生と活発な議論を戦わすというような場面は見られなかったことを反省点として、英語力向上に一層、力を尽くす。</p> <p>■研究活動における成果</p> <p>(1)研究成果(雑誌、学会発表、図書等)</p> <p>大学英語教育学会第54回国際大会において、グローバル化教育の先進的研究事例の分野にポスターセッションの参加を採択された。</p> <p>計3日間、訪れた多くの来場者より強い関心を示されたが、投げかけられる質問は、やはり両国間の英語</p>	

力の差異についてであった。

より必要不可欠な世界共通語となった英語での発信力を問うた場合、平均的な日本の大学生レベルの力では議論はおろか対等な対話が困難であることは自明であり、各大学の研究者も頭を悩ませるところである。

また、第 37 回日本「アジア英語学会」全国大会においては、セッション前後の本学参加者の意識の差異、自信の変化に焦点を当て、研究発表をおこない、大きな反響を受けることができた。「不安」「緊張」「苦勞」「大変」がキーワードとして検出されたプレセッション時と比較し、「楽しい」「笑顔」「仲良く」「喜んでもらう」「楽しんでもらう」「貴重」等の言葉がポストセッション時には全員から表され、明るい展望を見ることができた。

(2)学生・生徒の教育及び支援に関する還元

中級レベルに満たない英語スキルであっても、ノン・バーバル・コミュニケーションを工夫し、相手に対して敬意を持つこと、相手の文化に対してオープンな心を持つこと、何より伝えたいという熱意、誠意を表すことができ、それが相手に伝わるという実感を得るといふ貴重な成功体験は、次年度の参加学生への大きな励ましとなり、さらなる英語学習意欲、異文化学習意欲につながるはずである。